

宍林のことば(2006)

高橋悠治

[ソロ]
ほいまりにあったのは夜の水

[群] *p*
みんな水 みんな祀

[ソロ]
神々も人間たちも

[ソロ]
やみくもに歩いていたころが つまづきよぼらった老人みたい 道を照す光

[群]
もなく 休み量するのにも横になる土地もない 土地はない 光はない

sub. p
どうしようもない せ か い

[ソロ]
やがて神々は夜と水でおたがいにおつかりあってはら と立て

[群] [ソロ] [群]
はげしいことばでののしりだした 神々の怒りは大 きかった 神々は

大きかったから

[群] [ソロ] [群]
男たちと女たち きき耳コオモリの耳 コオモリの男と女は神々の大きな

怒りのさわざから かくれた やがて神々だけの残された

[群]
怒りがおさまり 気がつくとき 取り残されていた

[群] [ソロ] [群] 「泣き」

取り残された悲しみは大きかった そうなった悲しみで神々は泣きはじめ

「泣き」

泣き声は大きかった 男たちも女たちもいない神々だけ取り残され

(泣き)

なみだなみだ泣いて泣いて もっと水が氷にそそぎ どうしようもなくなった

[ソロ]

さらに夜と水が つづいた

[群]

水と夜が あんなにあふれたのは神々か? 悲しんで泣いたから

[群] [ソロ] [群]

取り残された寒さや身にしみる
神々は寒くなった

[ソロ] [群]

夜の氷が ますます寒い

[ソロ] [群] (バラバラに)

神々は吾を よい取り決めが、できるよりに取り残されたように

ほら穴から出てくるコオモリの男と女を迎之道を照らす光を迎之

[群]

[ソロ]

愛し休むため横になる土地を迎えるように それから神々はみんなて決め

(いっしょに)

[群]

いっしょに夢見て心をひとつに合わせ光を夢見土地を夢見よう

[群] *pp*

火を夢見て、いっとあたりは静まりかえり みんなでひとつの火を夢見た

[群] *p*

静けさのなかで' どこまでいさぶろの夜の水'

[ソロ] [群]

神々のあいだにひとつの傷印あらわれた 夜の水の表面の裂け目

→ (くりかえしなからすこしずつピッチを上げていく)

♪: ~~~~~

[ソロ]

ち。ほ。か。な。こ。は。か。み。と。

[群]

下 上 下

踊りながら大きくなり小さくなり長くなり太く

[ソロ1]

ほそく 変りながら踊った

七人の神々のまんなかで

[ソロ2]

[ソロ3]

その時七人たったのがわかったから おたかいいか? 見えて 数えてみると

七人になった

いちばん大きき最初の神々は七人だった

~~~~~ ♪: ~~~~~ (ここまで)

[ソロ]

[群]

急いで神々は ことばのことばに小屋をつくら

まんなかで踊っている子に たまって踊る子に 他のことばのことばたちか?

工地と光か?

夢から生まれて あつまってきた

じんをい話し出すと

やって来て火を P

とリ

望を見せ 見つめあり 触れあり 愛しあつた 光がある 土地がある 道が照らされ

横に なり 愛し 休む 光の 存の 土地の 存の

【ことばの踊り】 他のことばの存のことで表情を変えながら  
くりかえされる呼びかけの交錯

あす"      あす"      よる      よるのみす"  
光      よる      土地      アタリ  
あす      火      ことば"      ゆめ

[下]p      [与]よるのみす"  
よるのみす" (くりかえし独立に)

[群]      [ソロ]      [君羊]  
神は見えなくあつた 全体会議をひらくため 館にこもり

現れも入れないようにして 館の存かで神々はみんなで決める

火を消さないように 花の水は多 く 光と土地は

すにしろから  
(花の水) ~~~~~ (こゝろ)

[ソロ] [群]

そして決めたのは 火を上までほこぶこと 天まで

[群]

夜の木がとどかないように コオロシの男と女に 命令を伝へ

ほら穴の谷かにとどまって 天までとどく火を 起すように伝えた

神は車座に居て 火を囲み議論した

たれが上に火を

[ソロ]

ほこぶのか、下で死んで 上で生きるために 議論はまとまらぬ

[ソロ] [群]

神はたれも 下で死にたくぬい いちはん白い神が 行くべきだ

と 神には言った いちはんうつくしく 上の火も うつくしくなるさう

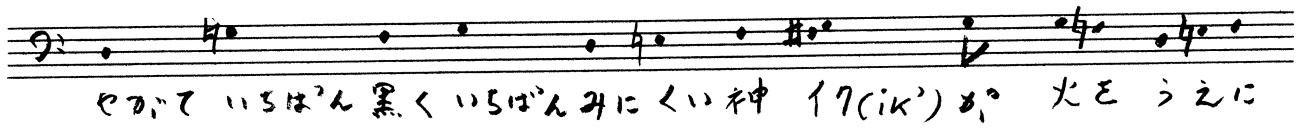
(バラバラに) 行くべきだ... 行くべきだ...

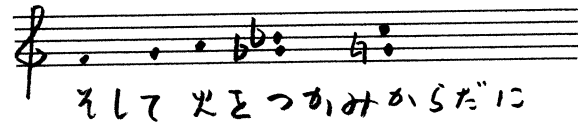
行くさう... なるさう...

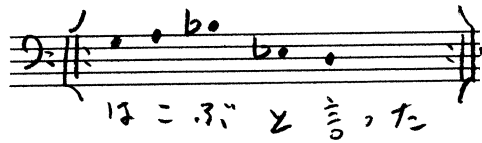
白い神は 臆病で 生きるために 死にたくなかつた

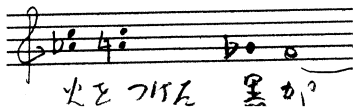
(バラバラに)

議論はまとまらぬ

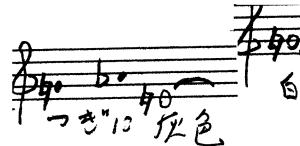

 ぐわて いちはん黒く いちはんみにくい神 イク(ik)の 火をう之に

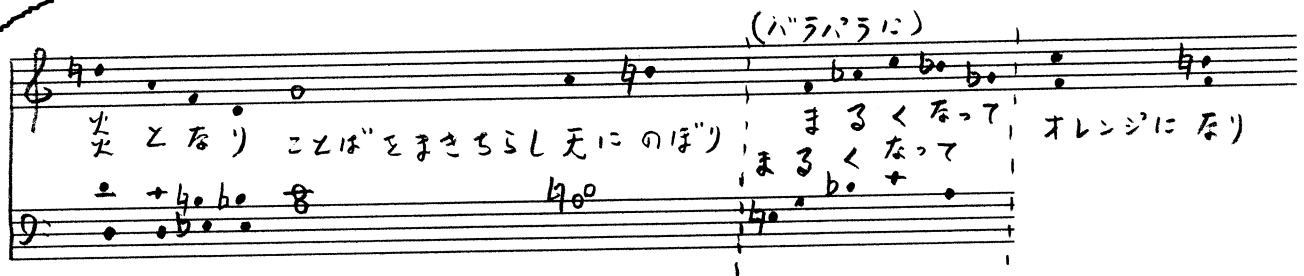

 そして火をつかみかすだに

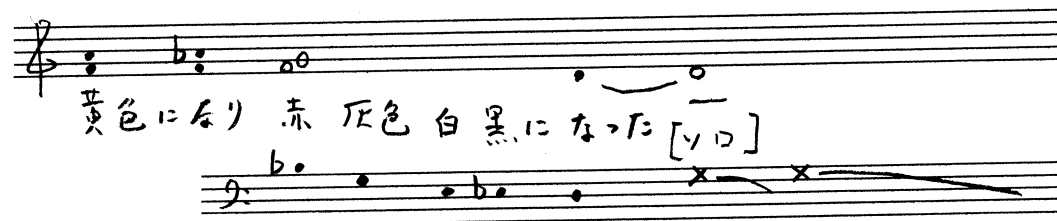

 はこそと言った


 火をつかえ 黒か?

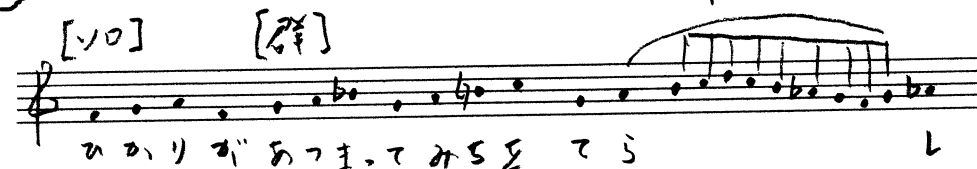

 そして赤  
つぎにオレンジ  
黄色  
白



 つぎに灰色


 (バラバラに)  
火と存り ことばをまきちらし天にのぼり まるくなくなって オレンジになり


 黄色になり 赤 灰色 白 黒になった [V.O.]

神は太陽と名付けた


 [V.O.] [群] ひかりがあつてみえてさ


 もとさき ま でよく見 えた


 [群] よりのみずははじに 息 い やら れ 山かできた

[2番]

白い神は 取すかしのあまり 注 ぎ つづけた 泣きかぎて

道が見えつづまがいて 火にこぼれこんだ

天にのぼったかー

とても かな しかた

臆病な自分を恥じて泣いたため

のなしく 青ざめた 火の玉は 白い神の色をして 太陽のそばにいた

[ソロ]

神々は この白い玉を 月と名付けた

太陽と月ほそこにいて 歩みをおた 神々は それを見て 悲しくなった

取すかしのあまり みんな 火にとど こんだ

